

## 2 ニューカレドニアのヌメアにおける

### INSTITUT FRANÇAIS D'Océanie

山 中 一 ( 南海区水産研究所 )

筆者は、1965年9～12月の間、南海区水産研究所の調査船俊鷹丸に乗船し、南太平洋の海況、稚魚の出現状況等の調査に当たった。その際、ニューカレドニアのヌメアに寄港する機会を得た。

編集者から、ニューカレドニアの水産事情について何かとの御注文であったが、同島には特別に注目されるような漁業は何もなく、ラグーン(礁湖)の中でのスポーツフィッシング、現地人による建網漁業等が細々と行われているにすぎない。又、同島の旅行記については、北杜夫氏の“南太平洋ひるね旅”、森繁氏の同島訪問記(文芸春秋)などがあり、今更筆を加える必要はないように思われる。したがって、ここではヌメアにあるINSTITUT FRANÇAIS D'Océanie 訪問を中心にして筆をすすめることにする。

美しいラグーンの中を通り、南太平洋の楽園といわれるヌメアに、俊鷹丸は11月7日入港した。港には、Mr. Tonnier 所長、Mr. Legand 夫妻等を始め研究所員一同、更に日系二世の筒井氏夫妻を始めとする多くの人々の出迎えを受けた。その日は、二世の方による全員の島内ドライブ、船長、調査員のMr. Legandの家への招待があり、夜は二世会の人々による歓迎パーティーが開かれた。

同港にあって滞在したことのある大洋漁業の大野氏によると、研究人員は数名程度とのことなので、小規模な研究所を予想していた。しかしながら、翌日訪問した研究所は予想以上に大きく研究人員の多いのにも驚いた。この研究所はフランスの海外科学技術省(ORSOM)に所属し、植物、動物、海洋等の数部より構成されている。我々の訪問したのは海洋部で所内最大の部となっている。Mr. Legandによると、1948年に彼を中心とした数人の研究員により研究を開始したが、1961年から次第に充足され、特にここ1年間における充足は目覚ましいものがあるという。

海洋部の研究員は、以下に示すように生物関係と海洋関係に分かれている。

生物関係 Mr. Legand	生産力関係	2名	海洋関係 Mr. Rotschi	栄養塩類	2名
	植物プランクトン	1名		海洋力学	1名
	動物プランクトン	2名		海洋光学	1名
	ミクロネクトン及びマクロ	1名		CO <sub>2</sub> 系	1名
	リーフのプランクトン	1名		バクテリア	1名

この他、助手6名、犬のPiccoloも加えて総計22名である。

研究内容についてみると、マクロ類の研究は、サモア又はサントに出張して日本漁船による漁況資料を集めて解析している。かつては、ORSOM III号により延縄調査を実施し、その解析にも当たっていた。ORSOM III号は老朽化の為に売却され、現在Coriolis号(450トン)という新鋭海洋調査船が配属されている。

同船については、既に宇田先生により前号に記述されているので省略する。現在の所、生物、海洋関係ともORSOMⅢ号及びCoriolis号による観測資料及び採集物の解析に当たっている。

研究所の建物は、第二次大戦中の米陸軍病院のものを使用している。したがって建物は古いが研究器材は最新のものを備え、新進気鋭の若い研究員が多く活気に溢れている。今後、Coriolis号が西部太平洋の赤道海域の観測調査に使用され、上記の若い研究員によってその解析が進められるならば、この海域における海洋学的、生物学的知見は飛躍的に増大するものと予想される。

Mr. Legandは、1961年ハワイにおける太平洋マクロ生物会議で会ったことがあるが、温厚な研究者である。彼の奥さんはタヒチの王女で、彼の家における士官一同の招待パーティーはタヒチアン、ホスピタリチーに満ち楽しい思い出として残っている。Mr. Rotschiは、スウェーデン、スクリップス研究所等をへて、この研究所に来たものであるが、フランス人的気質にアメリカ人的合理主義を加味した、立派な研究者である。既述したように、他の研究員は20代～30代の若さで、非常に明朗であり、気さくに説明や案内を引き受けてくれた。我々は、船上における塩検のテスト用として、T-Sサリノメーターを試用したが、比較実験を先方のAuto-Labサリノメーターと行った。その結果、両者の値が一致するや、ビールで乾杯してくれた。

俊鷹丸に対する研究所員の見学も行われ、全員の参加のため、狭いサロンは一杯になったが、楽しく日本のビールを味わってくれた。彼等の興味をもったのは、魚群探知機及び多層採水器であった。Coriolis号の士官一同の見学もあり、連日の交歓が続いた。

出港の前日には、Mr. Tonnier 所長の宏大な庭園でパーティーが開かれた。このように、ヌメア入港の5日間は瞬間に過ぎ、楽しい思い出を残しながら、俊鷹丸はヌメアを後にした。

### 3 北洋サケ・マス漁況便り

花 村 宣 彦 (東海区水産研究所)

(昭和41年7月19日付宇田会長および平野幹事)  
宛の花村宣彦博士(東海区水研)よりの書かん

その後、御変りなきことと存じます。

一向に御無沙汰しておりまして深く御詫び申し上げます。

今年も北洋に来ております。

私から申し上げるまでもないことですが本年の漁期には、海況異常から来たと思われる漁況異常のために各船団とも大変苦労したようであります。

漁期はじめ5月～6月はじめにかけて千島東方沖に大きく広くはびこっていた2℃以下の水帯のため、サケ・マスの各地方群は北上が押えられると共に沖合では例年よりはるかに東に魚道が偏り例年に比べると経度にして3°～5°近くも東寄りの東経169°～172°あたりが主魚道となりました。

来遊時期(成熟テンポ)も大分遅れていたようで各地方群とも1旬～1旬半ほどの遅れになっ